城西国際大学の6年制薬学教育

「遠くの大病院よりも、近くの頼れる薬剤師に！」

超高齢化と国際化が進む日本社会のこれからの地域医療を支えるために、主体的に行動できる薬剤師の輩出を目指しています。
従来の医療薬学のみならず、栄養、福祉、看護･介護、セルフメディケーションなどの幅広い専門知識と国際感覚を有し、あらゆるライフステージにある人々の健康に興味・関心を抱き、人々から信頼される、地域に根ざした薬剤師を養成します。

2015 年春､城西国際大学薬学部の卒業生が学位（博士号）を取得します。

学位取得､おめでとうございます。薬剤師免許取得後に就職する学生が多い中、大学院への進学を考えたきっかけは何だったのでしょうか？

（向本）目指していた職に就くためには、修士の学位取得が必要であったことがきっかけでした。また漠然と「研究とは何だろう」､「自分にも何かできることはあるのだろうか」という興味があったことも大学院進学を目指した理由の１つでした。

（岩舘）私は学部３年の途中から衛生化学研究室で実験をさせていただきました。はじめは指示していただいたことをこなすのみですが、だんだんと一つ一つの実験が意味することや目指すゴールが分かってきて････期待した結果が得られたり、得られなかったりに一喜一憂しながら、研究の楽しさに魅かれていきました。

修士の課程修了後に社会に出る学生も多いのですが、岩舘さんはそのまま博士課程に進学されましたね

（岩舘）きっかけは、現在の研究室の先生に誘っていただいたことでした。研究補助員を募集してその研究室に応募したところ、そのポストで採用でもいいけれど博士課程学生として考えてみないかと声をかけていただきました。当時は修士課程修了後すぐの進学は考えていませんでしたが、進学の提案をいただいてから悩みました。しかし、将来は研究職に就くことを希望していましたので、博士課程に進むことを決意しました。薬剤師としてアルバイトをすると自分で学費が全額出せることがわかったので、親にこれ以上学費を負担させずに済むなら行ってもいいかなと。学生時代にお世話になった河合先生に「マイナスになることはないはず」と言っていただいたことも背中を押してくれました。

向本さんは、修士の後に就職されましたね。職に就かれてからも、学位取得を目指した理由は？

（向本）仕事上、医療機関や大学の先生方、製薬企業の担当者等と医学、薬学に関する専門的なお話をする機会が多いことから、専門知識を増やし、円滑な対話ができるようにと考えたためです。また、修士課程の２年間での研究では、まだやり残したことがあったので、博士課程の４年間の研究を通じて研究成果を示したいと思い、博士課程への進学を決めました。

実際に学位を取得されたお二人にとって････振返ってこの10年間の学生生活はいかがでしたか？

（岩舘）学部の頃は通学時間や試験への影響が気になり､はじめは課外活動などには消極的でした。1年の頃、塾講師のアルバイトをしていましたが､「大学でもっと魅力的なことが見つかるといいですね。」という光本先生の言葉に導かれ、大学のゼミ研究に参加するようになりました。3 年次には衛生化学研究室内の生体リズム研究会に所属し、大変なこともあったはずですが、楽しかった！という思いが今でも強いです。そして、4 年次の卒業研究では、衛生化学研究室でさらに多くのことをやらせていただいて、すっかり研究の楽しさに取りつかれ、研究職へのあこがれを抱くようになりました。修士は慶應義塾大学薬学研究科の医薬品化学研究室に進学しました。医薬品化学は有機化学系の研究室で、目的に合う化合物を設計して合成し、作用や代謝経路を明らかにすることを行っていました。バックグラウンドが異なる先生方や先輩、同期とのディスカッションを通して新しい視点を学んだ２年間となりました。博士課程では慶應義塾大学の医学研究科の婦人科に進学したのですが、実験は東京医科歯科大学難治疾患研究所の分子細胞遺伝分野で、がんに関する研究を行いました。研究室の先生方に「その研究がどのように社会に貢献するのか」をたたき込まれた４年間でした。

（向本）学部の４年間は薬剤師になるための基礎固めの時期、修士の 2 年間は研究の駆け出しの時期、博士の４年間は研究の成果を示す時期だったと思います。その間に薬剤師国家試験、就職活動、博士論文作成などがあり、大変な時期もありました。自分では努力をしているつもりでも、結果に繋がらないときもあり、苦しい思いもしましたが、今、振り返ってみると、あきらめずに続けてよかったと思います。実際に、学生時代に目指していた職にも就くことができ、充実した日々を過ごしています。就職して６年目になりますが、どうやって仕事を進めたらよいかも少しずつ身につき、問題点を見つけ、周りと意見を出し合いながら解決策を見いだしていく仕事にやりがいを感じています。

向本知香さん(2008年3月卒)と児玉教授
千葉大学大学院医学薬学府薬学研究院（修士課程）修了
千葉大学大学院医学薬学府薬学研究院（4年博士課程）修了見込
博士（医薬学）

研究生活はたくさんの苦悩があったと思います。振返って、一番大変だったことは何でしたか？　そして、その壁をどう乗り越えましたか？

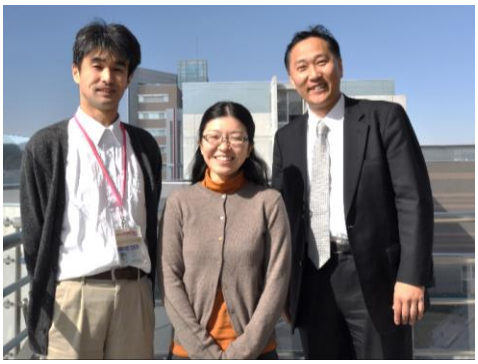
（岩舘）やりたいことに対して自分の時間的・能力的キャパシティが足りないと感じたことです。そんな時は、いつも指導教員に相談しました。やりたいことに優先順位を付けて、それでも時間が足りない部分は他の方に協力していただきました。能力的な部分はひたすらトレーニングですね。一人だと乗り越えられないことがたくさんあるので、抱え込まないことが大切だと思いました。

（向本）私の場合、博士課程の４年間は、修士課程の２年間にはなかった仕事、結婚、育児が加わったため、研究と仕事と家事の両立が一番大変でした。とにかく、時間に追われる毎日で････。研究の時間をどのように確保するかを日々、悩みながら過ごしていました。そんな時は、1 日の時間管理を大事にしました。平日は仕事があり、朝６時から夜９時までは研究の時間を確保することが難しいため、平日は朝 3～6 時、夜 9 時以降、週末を利用して研究の時間を確保しました。また、家族の協力はとても励みになりました。週末は図書館を利用したりして、集中できる環境を整えました。

二人とも、苦労が実りましたね。これからの目標をお聞かせください。

（岩舘）自分がワクワクしながら研究を続けること････社会に貢献できる内容で！そのためには、「Hesitate しない！」､「ネガティブ厳禁！」､「自分で道を切り開く」････。多くの方からいただいてきた言葉を実践していくことです。

（向本）学位取得は、研究者としての始まりだと思います。これからも、日々勉強を重ね、専門的な知識を深め、職務に生かしていくことを通して、医療に貢献していきたいと思います。



岩舘怜子さん(2009年3月卒)と
光本教授(右)、河合准教授(左)
慶應義塾大学大学院薬学研究科（前期博士課程）修了
慶應義塾大学大学院医学研究科（博士課程）修了見込
博士（医学）

最後に、後輩学生たちに一言メッセージをお願いします

（岩舘）目の前の課題は確実にこなしつつ、手の届くチャンスには全力で取り組んでほしいと思います。きっと心をくすぐる何かに出会えます。

（向本）将来、こうなりたいと思うものがあれば、今やることが必然的に見えてくるのではないでしょうか。そういう意味で、目標を持つことは大事だと思います。すぐに結果がでなくても、途中で意味を感じないような気がしても、あきらめずに向き合っていると、気が付かないうちに何かを得ていることがあるように私は思います。